

さらに経済成長に伴って取扱いの容易な軽二輪車やスクーター（原動機を座席の下に設け、前方に足踏み台のある二輪自動車）が出現するに及んで婦人や老人に愛用されるようになって、急速に普及し、今日に及んでいる。

第四節 鉄道の開通

日清戦争（明治二七～二八年）後は、全国的に私設鉄道敷設ブームが起きた。本県においても明治二九年に徳島鉄道株式会社が創立された。そして、明治三十一年に徳島・蔵本間、府中・西麻植間に鉄道が開通した。翌三十三年に国府・蔵本間、西麻植・学島間、学島・湯立間が開通し、続いて三十三年八月に学島・船戸（山川町西川田）間が完成した。この鉄道は鉄道国有法によって政府に買収され徳島・船戸間は国鉄徳島線となった。この徳島線を延長して「香川県下琴平ヨリ高知県下高知ヲ経テ須崎ニ至ル鉄道」に接続させるため、川田・阿波池田間の官設を計画した。四五年一月に起工、二年有余をついやして、大正三年三月二五日完成した。このとき、起点付近の新線上に川田駅を新設し、従来の船戸駅を廃した。これで国鉄徳島線が全通した。これより以前は、吉野川の川舟が物資輸送の幹線であった。ところがこの鉄道の全通によって「ひらだ・えんかん・高瀬など」の川舟は、完全にその姿を消すとともに、川岸に栄えた「津」はその繁栄を国鉄駅に奪われることになる。

（参考書『徳島県史』・『四国鉄道七五年史』）

徳島・船戸間鉄道開通式

開通式は明治三十三年八月六日に挙行された。その当時山口村助役の職にあった武田好忠宛に、徳島鉄道株式会社板東勘五郎社長から、招待状

が届けられている。子孫の武田光司家に保管されている招待状は次のとおりである。

拝啓仕候 茲々御清適大賀ノ至リニ存候 陳者本会社山崎・船戸間鉄道工事落成至是ニテ徳島船戸間全線踏懸皆竣工候ニ付 来八月六日船戸停車場構内ニ於テ開通式挙行致度候間 炎暑ノ砌リ特ニ御多忙中恐縮ノ至リニ候ヘ共万障御繰合せ本社へ御賀臨被下度 右御案内迄得貴意度如斯ニ御座候
早々不悉

徳島鉄道株式会社

明治三十三年八月一日

社長 板東勘五郎

武田好忠殿

通テ本件開通ニ記致貴族様所存御熱誠ヲ謝ス尚且御栄臨ノ節必ス此招状ハ始終御持帰下度又御榮否共前目録ニ御一報相煩度候

一 鉄道輸送の変遷・消長

国鉄徳島線の開通によって、旅客・貨物の輸送は年を追って発展し、国鉄は唯一最大の輸送機関であった。本町内にある穴吹駅と小島駅、なかでも穴吹駅は西阿交通の要衝として繁栄を続けた。しかし、昭和四五年ごろから自家用車の増加により国鉄の利用者はしだいに減少し続けている。数字であらわすと、次ページの表のとおりである。

二 鉄道による貨物輸送

大正三年三月、鉄道開通時に穴吹駅前には、㊤宮田運送店・㊦井口運送店と井井口与運送店との三店が、それぞれ店舗を構えて営業を開始した。

ところが一駅三運送店では過当競争の弊が大であったので、㊧穴吹運送株式会社を資本金五万円で昭和二年二月に設立し、一本化をはかった。

(鉄道輸送時代からトラック輸送の時代へ)

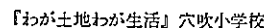
(昭31、新町建設計画書)

し、たちまちにして鉄道輸送を追い越し、自動車時代へと移行するのである。

昭和四九年一〇月からは、貨物列車が運行廃止となり、駅員配置を廃止（無人駅という）したり、貨物取扱いを廃止する駅が逐年ふえ、穴吹駅もついに昭和五九年から貨物取扱いを廃止した。

昭和六一年現在、駅員配置駅は徳島・佐古・石井・鴨島・穴吹・貞光・阿波池田の七駅で、貨物取扱駅は徳島・阿波池田の二駅にすぎない。

昭和23年度 穴吹駅移出噸数貨物表



た。しかし反面、一駅一店になるとあまりにも独占事業化するとの世論もあり、同年六月、㊤共同運送店が貨物取扱いを開始したので一駅二店制となった。しかし、この㊤店は昭和一五年四月に㊦吹運送株式会社に吸収し買収された。

昭和一七年一二月、戦時統合による美馬・三好郡各駅運送会社が合弁で創立した。そのために阿波池田通運株式会社を資本金五〇万円で創立した。そのために駅業務の貨物は㊤が一手に引き受け各家庭・事業所に配達し、また集荷するようになった。ことに穴吹駅はその駅勢圏が広く、口山・古宮・木屋平村・江原・脇町の全部と三島・岩谷の一部であったので、

德島鐵道株式會社列車轉運時刻表

[illegible]

国鉄穴吹・小島駅乗降客数

区 分	穴 吹 駅		小 島 駅	
	年 間	一日平均	年 間	一日平均
大 3	開通年	383 ^人	大 5 (三島村勢要 路)	48 ^人
昭 27		3,577 ^人		509 ^人
30	1,483,708 ^人	4,064 ^人	235,610 ^人	648 ^人
35	1,354,377	3,711	219,788	602
40	2,218,470	6,078	151,443	415
45	1,735,940	4,756	191,389	524
50	1,176,055	3,222	143,909	394
55	1,082,617	2,966	54年 106,364 (昭57無人駅とな る)	291
60	984,770	2,698		

(町統計書、昭31新町建設計画書、『わが土地わが生活』等による)

沿革

三 穴 吹 駅

明治三二年、三三年の間に徳島・船戸川口間が徳島鉄道会社線として開通した。その詳細は次のとおりである。

明治三二年二月一六日、徳島・鴨島間一八、九キロメートル

開業。

明治三二年八月一九日、鴨島・阿波川島間三、八キロメートル開業。

明治三二年二月二三日、阿波川島・山瀬間六、三キロメートル開業。

明治三三年八月七日、山瀬・船戸川口間五、一キロメートル開業。

大正三三年三月二五日、川田・阿波池田間四〇、〇キロメートル新線開業、新線上に川田駅を設け、船戸駅を廃止した。穴吹駅もこの時誕生したのである。

昭和四八年一〇月一日、穴吹駅における貨物取扱廃止。

昭和五七年一二月一五日、徳島本線CTC使用開始。

昭和五八年二月一日、トラックによる荷物代行輸送実施。

昭和六〇年三月一四日、穴吹駅における荷物取扱廃止。

第五節 自動車交通時代

戦時中における自動車は、軍用車両の優先生産あるいは軍隊への徴用などで徹底的な打撃を受けていた。したがって終戦直後の物資や人員の輸送は、鉄道に集中せざるを得なかつ

鉄道旅客発着通過人員の推移

駅名・要項 年度	穴 吹 駅			小 島 駅		
	総 数	定 期	定 期 外	総 数	定 期	定 期 外
昭和30年	736,539	518,568	217,971	120,987	81,457	39,530
	747,169	—	—	114,623	—	—
〃 35年	672,577	422,417	250,160	110,276	72,809	37,467
	681,800	—	—	109,512	—	—
〃 40年	562,356	291,256	271,100	59,640	29,212	30,428
	597,071	315,855	281,216	91,802	65,689	26,113
〃 45年	675,720	407,372	268,348	92,919	72,747	20,172
	635,827	407,372	228,455	98,470	72,747	25,723
〃 50年	599,499	362,692	236,807	69,071	54,830	14,241
	576,556	362,692	213,864	74,838	54,830	20,008
〃 55年	550,603	359,678	190,925	—	—	—
	532,014	359,678	172,336	—	—	—
〃 57年	498,819	327,952	170,867	—	—	—
	481,787	327,952	153,835	—	—	—

(穴吹町統計台帳)